

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

“おとな組”の私たちの現実

「私たち 愛とか そんなふんわりしたものだけで 育児してないよね」——『ひだまり保育園 おとな組』を取り巻く“おとな”たちを描いた本書には、現代の子育てのリアルが溢れている。

育児と家事の一切を妻が担うワンオペ育児、朝晩にバイトをかけもちするシングルマザー、10代での出産と40代での高齢出産、「保育園落ちた」自営業、育児休暇の取得を上司に渋られる夫……。こうした“親”であるおとなたちの生活に、夫婦のセックスレス、不倫、子どもの死、保育園への「脅迫」書き込み、子役オーディション、児童ポルノサイトなど、性や生をめぐる問題が押し寄せる。

子育ては、子どもを育てることではない。この社会のなかで生きることであり、子どもをめぐる事柄は“おとな”の事情にほかならない。

子育ては「愛情だけではムリで 愛情抜きでもムリ」なもの。それにも関わらず、夫も、職場も、社会も、母親による育児をアテにしすぎている。子どもはかわいい。ひとつひとつの育児が難しわけでもない。でも、やることが多すぎる。一人でやれることではない！でも、そうした母親の本音を「察して」欲しいと期待してしまうこと自体、女性が「常にダンナのことを察してあげちゃってる」というジェンダーの罠にハマっているのだ、と登場人物たちは気づいていく。役に立たない男たちを吊るし上げるのでもなく、無慈悲な世の中を糾弾するのでもなく、本書が問い続けるのは、社会の隅々にはびこるジェンダーだ。

『ひだまり保育園』に勤めるゲイの男性保育士は、女性カップルとの間に子どもをもうけた「パパたち」の一人でもある。そんな彼が葛藤するのは、自身のセクシュアリティを隠した「ウソまみれの話」をするこ



ひだまり保育園 おとな組 (全3巻)

坂井恵理著

双葉社

定価 650 円＋税 (第1巻)

定価 690 円＋税 (第2巻)

定価 730 円＋税 (第3巻)

とだけでもなければ、男児をもつ親に敬遠される恐れ
の理不尽さだけでもない。個性を尊重するといいな
がら「みんなで同じこと」をするのをよしとする、おと
なの期待からはみ出さない子どもを求める保育園の価
値や文化である。「あそこに 僕らの居場所はない」と
語る保育士の苦悩は、セクシュアリティを超えて、あ
りのままで生きられない社会の問題を問うている。

虐待や性犯罪のシーンを描かずして、子どもに対す
る暴力について取り上げた作者の技量と熱意も圧巻。
保育園のプール写真が児童ポルノサイトに転載された
ことに対し、「かわいいから」「LGBTとかを差別し
ちゃダメなら ロリコンだって認められていいはずで
すよね？」という言い分に、ある母親は違和感を唱え
る。そこには、幼い子どもを「いいなり」にさせたい、
「女より優位に立ちたい」という支配をめぐる願望が
あるのではないか。そうした自分の弱さを「まるごと
受け止めてほしい」といって子どもを求めることは、
性癖とは異なるものではないか、と。おとなたちは対
話を重ねながら、セクシュアリティと暴力を取り巻く
偏見や思い込みを解いていく。子どもたちのために、
そして、かつて傷つけられた自分自身のために、おと
なたちは、時に勇気をふるい言葉を紡いでいく。

各話完結のオムニバスだが、それぞれの家族の話が
少しずつ絡み合い、ゆるやかなつながりが生み出され
ていくのも心地よい。立場や苦勞を異にする人たちが
視線や言葉を交わし、ときに互いの違いに衝撃や苛立
ち、悲しみを覚えながらも、やがて同じ思いや傷つき
がおとなたちの関係性を深めていく。

おとなと子どもが育ちゆくこの社会には、ジェン
ダーをめぐるさまざまな困難がある。「世の中も 私
も手強い」——向き合うべきは自分の価値観と生き方。
でも、その挑戦は、ひとりじゃない。“おとな組”が
挑むべきチャレンジなのだ。

(大阪大学大学院准教授 野坂祐子)